

全校のみなさん、おはようございます。

十月に入り、朝晩過ごしやすい気候になりました。

さて、先日のスポーツフェスティバルを終え、年度も折り返しにさしかかりました。年度当初、「一年間は長いだろうな」と思っていました。だが、そう感じないのは皆さんが学校生活に「慣れた」からでしょう。

私たちが生活していく上で、「慣れる」という行為は、友人との関係を穏やかにさせたり、仕事の能率を上げたりする上で重要な行為です。もし物事に「慣れる」事ができなかつたとしたら、常に、大きな不安に自分をさらし続けねばなりません。ですから、適度に「慣れる」ということは、生きていく上で必要不可欠といえるでしょう。

しかし、「慣れる」ことで物事に集中できず、ダラダラとだらしない生活をしてしまったり、自分のやりたいことや好きなことだけに気を取られて、自分自身の現実が見えなくなり、他人に迷惑をかけていることに気づかなくなってしまうたりします。物事に慣れると、そのことと自体に対する意識は薄くなり、最初頑張っていた頃の新鮮な気持ちや周囲への気配りを忘れがちになってしまいます。そして、その分、自分が今置かれている立場と別の方へ意識がいつてしまいがちになります。確かに、いろいろなことに興味を持ち、やりたいことにどんどん挑むと言った姿勢は大切ですが、今この時、一分一秒も大切な時間であることにかわりはないのです。

皆さんが東本願寺研修でお勤めした『正信偈』に

三蔵流支授浄教（さんぞうるしじゅじょうきょう）

焚焼仙経帰楽邦（ぼんしょうせんぎょうきらくほう）

という言葉があります。

この言葉は、昔、中国に曇鸞というお坊さんがいて、何年もの修行の末に、仙経という教えをいただきました。ところが、お寺に帰る途中、三蔵に出会い、浄土の教えを聞いて、苦労して手に入れた仙経をあっさり焼き捨てたという話について述べている部分です。

先程の話にあるように私たちは、「慣れて」しまつと、そこに胡坐をかいてしまい、そこから抜け出せなくなりまふ。しかし、この曇鸞の姿は「これだ！」と思つた時に、「慣れる」ことから抜け出す勇氣も大切なのだと、私たちに身を持って示してくださいまふようです。

普段の何気ない生活の中でも、物事をただ当たり前の繰り返しとしてとらえるのではなく、いつも新鮮な気持ちで受け止めたまふものです。